

保育ドキュメンテーションをもとにした保育者の省察に関する研究 ーA 保育者の保育ドキュメンテーションの分析及びインタビュー調査からー

A Study of Early Childhood Educators' Reflections Based on Documentation: Through the Analysis of Documentation and the Interviews of Early Childhood Educator A

小木曾友則¹⁾

KOGISO Tomonori

抄録: 本研究は、保育ドキュメンテーションを作成している保育者がどのような関心にもとづいて記録を作成しており、記録にはどのような省察の視点が見られるかを検討した。A 保育者が作成した保育ドキュメンテーションに対して KH Coder による計量テキスト分析を行い、分析結果を踏まえて A 保育者にインタビューを実施した。記録の分析及びインタビューから、保育ドキュメンテーションを作成する過程で保育者が意識していた子どもの姿や省察の視点を整理した。結果として、A 保育者は保育ドキュメンテーションを作成する際、自身が面白いと感じた場面を意識しており、これらの記録には、子どもがある“もの”と関わる体験と、別の“もの”と関わる体験とを結びつけていくといった、「子どもの活動における変化や発展を捉えようとする省察の視点」や、「自身の保育のねらいや子どもに対する願いに関して改めて問い直そうとする省察の視点」が含まれていることが明らかになった。保育ドキュメンテーションを作成し、記録をもとに振り返ることは保育者の省察を促し、保育の質の向上に寄与するといえる。

キーワード: 保育ドキュメンテーション, 省察, 保育の質

I. 問題の所在

乳幼児期の教育に対する世界的な関心の高まりや、我が国の保育政策の動向から、保育の質に関する議論は広がりを見せてきた。保育の質は、国、地域、園、個人などに応じて問題は様々であり、多元的で多様な内容が含まれる相対的な概念である¹⁾。我が国では、保育の質は子どもの経験の内容とそれらを保障する実践及び人的・物的環境など、子どもを中心に語られる様々な要素から成り立つものとして考えられている²⁾。これらに含まれる保育内容や保育者の専門性などの質の向上に関して、保育所保育指針解説(2018)には「保育の質の向上を図るには、保育所において子どもの保育に関わるあらゆる職種の職員一人一人が、その資質を向上させることが大切である。特に、保育士は、毎日の保育実践とその振り返りの中で、専門性を向上させていくことが求められる。」³⁾と示されている。保育者が専門性を向上させるためには、計画と実践、その振り返りのサイクルが必要となる。

保育者が実践を振り返る方法のひとつが、記録による振り返りである。保育所保育指針では「保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。」⁴⁾としており、保育者がよりよい保育を実践するための手立てとして記録から振り返ることを挙げている。保育の記録には、目的に応じて様々な様式が採用される。例えば保育の計画と実践を記録した長期的・短期的な指導計画や、ある特定の場面について子どもの言動や保育者の関わりを記述したエピソード記録などが挙げられる。

目的や用途によって様々な形で作られる記録の内、子どもの活動の過程を可視化し、子どもや保育者、保護者と共有するための記録として、写真とエピソード記録からなる保育ドキュメンテーションが注目されている。ドキュメンテーションは「記録」という意味であり、我が国では公的な文書として文字を中心としたものとして発展してきた⁵⁾。一方で、イタリアのレッジョエミリア市で開発されたレッジョエミリアアプローチの中に位置付けられているドキュメンテーションが世界的に注目され、我が国においても保育者や子どもに保育活動の省察や解釈をもた

¹⁾ 中部学院大学短期大学部幼児教育学科

らし、協同的な探究が行われる機会を生み出し、保護者や地域の対話につながるという機能が取り入れられてきた。大豆生田・おおえだ (2020) は、こうした背景と我が国の保育文化を踏まえて、学びのプロセスを可視化する対話のツールとして、写真つきの記録を日本版保育ドキュメンテーションと呼んだ⁷⁾。近年、保育の ICT 化によって、様々な記録方法が連動することが可能となり、保育ドキュメンテーションを作成するための敷居が低くなりつつある。それに伴い、保育方法として実践的研究が進むだけでなく、保育ドキュメンテーションの記録方法や、活用方法も議論されてきた。

森 (2016) によると、子どもの学びのプロセスを丁寧に描き出す保育のあり方が重視される中で、育ちを可視化することは、保育の質を測るバロメーターのひとつとされるという⁸⁾。保育ドキュメンテーションは、保育の質を検討するツールとしての可能性を秘めている。

II. 研究目的

本研究の関心は、写真とエピソード記録で構成される保育ドキュメンテーションは、保育者の実践と振り返りにおいてどのような意義があり、保育の質の向上に寄与するかという点である。これを検討するために、本研究では保育ドキュメンテーションを作成している保育者がどのような関心にもとづいて記録を作成しており、記録にはどのような省察の視点が見られるか明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究対象

研究の協力者は、保育業務に ICT を取り入れており日常的に記録の蓄積を行っている幼保連携型認定こども園 U 園に勤務する 9 名の保育者である。担任としてクラス運営を行う 9 名の保育者の内 6 名が新任保育者であり、就任後初めて保育ドキュメンテーションの作成を行ってきた。保育ドキュメンテーションの作成が初めてとなる新任保育者の記録にはどのような省察の視点が含まれているか明らかにすることは、記録をもとにした実践と振り返りの意義を検討する上でも重要であることから、本研究では年中児担任の A 保育者 (1 年目) を分析対象とした。

2. 分析データ

分析したデータは、A 保育者が作成した保育ドキュメンテーションのテキストデータ (記録期間 2022 年 4 月から 11 月) 及び 2022 年 12 月に実施したインタビューのデータである。インタビューは保育ドキュメンテーションの分析結果を踏まえて行い、内容は保育ドキュメンテーション作成において意識している点や、分析結果に対する感想や保育の考え方などを自由に語る形で行った。分析のために、インタビューで録音したデータをテキストデータに変換した。

3. 分析方法

分析方法はまず、A 保育者が作成した保育ドキュメンテーションに対して KH Coder による計量テキスト分析を行い、出語の出現頻度を概観した上で、抽出語同士の関連性を捉えるために共起ネットワークを作成した。共起ネットワークの集計単位は文毎で行い、出現数による語の取捨選択は、最小出現数を 10 と設定し、描画する共起関係は上位 70 とした。上記のデータを基に保育ドキュメンテーションの文脈に沿いながら記録の傾向を把握した。

次に、保育ドキュメンテーションの記録の傾向を踏まえて A 保育者にインタビューを行い、日頃意識している点や記録を踏まえた新たな気づきなどを聴き取った。インタビューデータはテキストデータに変換した上で A 保育者が改めて意識した記録の観点や省察の内容を考察した。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究協力者である保育者及び U 園の園長に対して、本研究の目的と研究方法、個人情報の取り扱いに関して、個人情報に適用される法令等の遵守と、取り扱う情報に含まれる氏名等は個人を識別できる情報を削除し、独自の符号を付す作業を行うことを書面及び口頭で説明して同意を得た。なお本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部の研究倫理委員会の審査を受け、承認を得て実施した (承認番号: C22-0048)。

IV. 結果及び考察

U園では、保育施設向け ICT システムを導入しており、システム内で保育ドキュメンテーションを作成している。1週間に1事例の頻度で保育ドキュメンテーションを作成し、データは印刷をして全園児が出入りする玄関に掲示をしている。掲示された保育ドキュメンテーションは、保護者や園児が閲覧できる。また、保育者間では、システム内でも掲示でも見ることができるため、互いの記録を確認し合っている。この保育ドキュメンテーションは、タイトル、2〜3枚程度の写真と、写真の状況を説明したコメントに加え、200字以下のまとめの文章で構成されている(図1)。

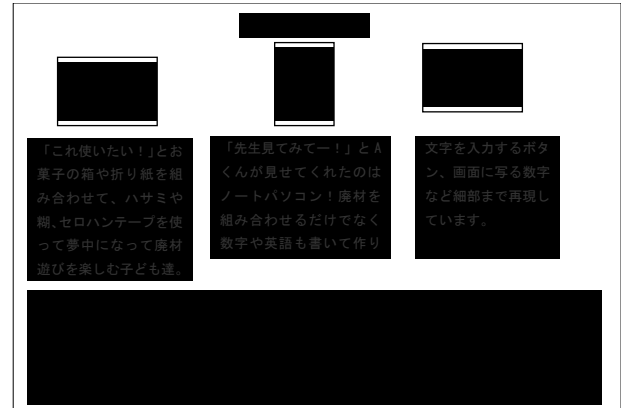


図1 A保育者のある日の保育ドキュメンテーション

このように蓄積されてきたA保育者の保育ドキュメンテーションのテキストデータを質的に分析し、分析結果を踏まえたインタビューを実施した。以下ではまず、保育ドキュメンテーションの分析結果を示し、次に、インタビューでA保育者が語った内容を示した上でA保育者の省察の視点を検討する。

1. 保育ドキュメンテーションの分析結果

A保育者の保育ドキュメンテーションに対してKH Coderによる計量テキスト分析を行った。保育ドキュメンテーションの全テキストから抽出された語の内、頻出語上位20のリストを表1に示した。

表1を概観すると、最も用いていた語は「遊び」であった。この語の用い方は、大きく2つに分けられる。ひとつは、遊びの名称として用いられており、もうひとつは、子どもの姿や活動そのものを説明するために用いていた。

遊びの名称に関しては、保育ドキュメンテーションには以下のような記述が見られた。

自由遊びの時間、何やら塗り絵を裏返して真剣に絵を描くAちゃん、Bちゃんの姿がありました。何をしているのだろうと様子を伺っている...

このように、〇〇遊びという形で「遊び」という語が用いられていた。

子どもの姿や活動そのものを説明している用い方としては、保育ドキュメンテーションには以下のような記述が見られた(下線は筆者)。

先週から自由に使えることになったセロハンテープを使って、作りたいもののイメージを膨らませて、思い思いに楽しむ姿が多く見られました。・・・子どもたちの作りたいもの、なりたいたいもの、遊びたいことが次々に広がります。道具や素材の適切な使い方を丁寧に伝えて、子どもたちの“やってみよう”が広がるように関わっていきたいと思います。

自分の好きなことを見つけて、様々な方法で自分なりの表現の世界を楽しむAくんの姿を見て、好きなことからこそ育まれる集中力や探究心、表現力があるのだと改めて感じました。遊びが停滞する場面では新しい遊びを提案することも大切ですが、継続して同じ遊びを繰り返す中で育まれる力もあるので、子ども達の楽しむ世界に寄り添いながら柔軟に関わっていきたくて思いました。

子どもの姿や活動そのものを説明する場合、保育者の指導・援助の改善の視点が含まれているという点も読み取ることができる。

「遊び」という語の次に出現回数が多かった語は「作る」であった。保育ドキュメンテーションには以下のような記述が見られた(下線は筆者)。

表1「頻出語上位20のリスト」

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	遊び	70	15	一緒	17
2	作る	63		伝える	17
3	子ども	55	16	遊ぶ	16
4	見る	48	17	嬉しい	15
5	友達	41		気持ち	15
6	楽しむ	40		水筒	15
7	自分	39		製作	15
8	思う	38		廃材	15
9	姿	32	18	自由	14
10	保育者	23		粘土	14
11	持つ	22	19	テープ	13
12	気づく	20		絵本	13
13	言う	19		感じる	13
14	楽しい	18	20	カード	12
	見せる	18		グループ	12
	今日	18		トイレットペーパー	12
	使う	18			
	声	18			

A ちゃんが隣の席の B 君の様子が気になり真似をしていくと、あっという間にグループ全員が顔の周りにクルッと折り紙を貼り始めました。友だちと一緒に作る経験を通して、同じようにやってみようという気持ちが生まれたようです。楽しいが自然と伝わっていく瞬間にまた立ち会えて私も嬉しく思いました。

「作る」という語は、製作活動の場面で用いられていた。A 保育者が作成した保育ドキュメンテーションには、ものに関わりながら作ったり友達に関わったりする姿が多く記録されていた。

次に、単語同士の結びつきを探るために共起ネットワーク分析を行った(図2)。共起ネットワークは、文章中に表れる語で出現パターンの似通った語、つまり共起の程度が強い語を線で結んだネットワークとして表したものである。

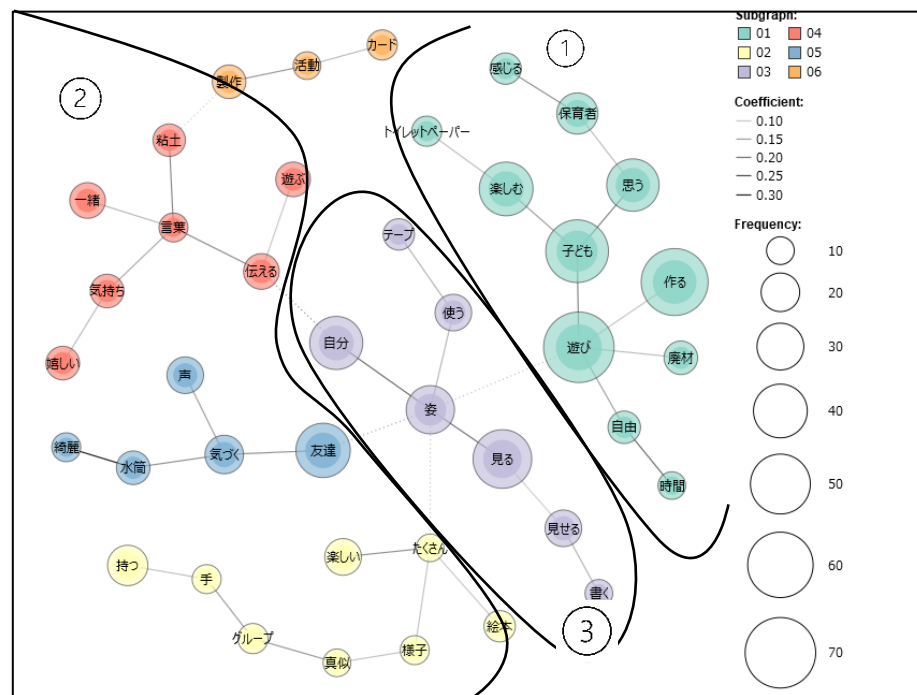


図2 A保育者の保育ドキュメンテーションの共起ネットワーク

出現回数が最も多かった「遊び」という語と共起関係が強かった語は「子ども」「自由」「作る」「廃材」だった。前述したように、「自由遊び」や「廃材遊び」といった遊びの名称として用いられていたことで共起関係が強く表れたといえる。次に出現回数が多かった「作る」という語も「遊び」と結びついていることから、A 保育者の保育ドキュメンテーションでは遊びの中で何かを作る姿が多く捉えられていたことが読み取れる。この他に強い共起関係が表れた語として、「自由」－「時間」や、「保育者」－「感じる」、「言葉」－「伝える」、「自分」－「姿」、「姿」－「見る」、「友達」－「気づく」などがある。

これらの共起パターンから、A 保育者の保育ドキュメンテーションは大別すると、「①遊びの中で子どもが作ることを楽しむ」、「②友達と関わりながら、気付いたり言葉で伝えたりする」、「③子どもが自分で活動に向かう姿」という枠組みで記録されているという点が考察できた。

2. インタビューの分析結果

A 保育者の保育ドキュメンテーションを分析した結果、遊びという語を用いながら特定の場面や子どもの姿を捉えようとする点や、作るという語を用いながらもものに関わる姿を捉えたり、友達と一緒に活動したりする姿、子どもが自分で活動に向かおうとする姿を捉える記述などの特徴が見られた。この分析結果を踏まえて、インタビューでは、日頃保育ドキュメンテーションを作成する際に意識していること、記述の特徴に対する感想や自身の考えに関して聞き取った。以下ではインタビューでA 保育者が語った内容から、A 保育者の省察の視点を検討する。

はじめに、質問者から A 保育者が日頃どのようなことを意識しながら保育ドキュメンテーションを作成している質問すると、A 保育者は次のように語った。

質問者 : 先生は普段からエピソードとかをまとめたドキュメンテーションを作成していると思うんですけど、どんなふうに日頃意識して作成されてるか、お話していただいてもよろしいですか。普段どんな場面を書きたいなと思って作ってみえますか。
A 保育者 : 子どもたちと一緒に遊びながら、面白いこと言ってる^①ぞとか、面白いこと始まったぞ^②って思った時に、見たり、様子をうかがったり、一緒に参加したり。

A 保育者は子どもの遊びの中で、発話や遊びの展開などに注目している。中でも下線①、②のように、A 保育者が「面白い」と感じた場面を記録しようとしていることが読み取れる。A 保育者が保育中や保育ドキュメンテーションの作成においてある場面を思い起こす際に意識を向けるテーマは「面白さ」にあるといえる。保育中の面白い場面というのは、子どもが楽しんでいたり、工夫していたりするという子ども自身が面白さを味わっている場面もあれば、保育者の見方や考え方などによって面白いと感じるという保育者の主観的な場面もあるだろう。

次に、上記の A 保育者が関心を寄せる面白さとは具体的にどのような場面かという点に関して聞き取りを行った。質問者からは、A 保育者の保育ドキュメンテーションの分析で得られた「遊び」という語の特徴や、「作る」という語を用いる場面や、友達との関わり、子どもが自分で活動に向かう場面など記録されていたことを伝えると、A 保育者は次のように語った。

質問者 : どんな言葉を先生が使っていらっしゃったか調べてみると、今おっしゃられたような「遊び」が一番出てきていて、続いて「作る」とか「子ども」「友達」「楽しむ」という言葉が出てきたっていうのが見えてきました。
先生の記録の「遊び」っていうのは、外遊びとか自由遊びとか粘土遊びとか、「〇〇」と「遊び」をくっつけた名前のある遊びっていうのも使ってるんですけど、その他にも名前のない、「遊んでいると」とかっていうところがありました。
他の先生たちも割と「作る」という言葉が使われてたんですけど、先生の心が動く時って、製作場面とかも多いんですか。
A 保育者 : 多分うちのクラスに製作が得意な子がいて、その子のつぶやきがすごく面白くて^③。こないだもクリスマスツリー作ったんですけど、みんなは一生懸命好きな色を塗ってたんですけど、絵の具で。その子は「僕、クリスマスカラーにする」とか言っていて、赤と緑と黄色とか交えながら作ったり。その子が次に「あ」って言ったんです。そしたら、さっきクリスマスの色してたのに、もう何か紫の薄い色に変わってて、どうしたんだってよく見てたら、「先生見てよ、これ段ボールの上で混ぜたら、こんな色になった」って言って面白くて^④。
その子の中でいろいろ発見がどんどん面白く展開してくのがあって^⑤、多分そういうクラスの子も多い。
製作とかで得意な子が多くて、つぶやきがすごい出てくるっていうのが、その子どもの姿から撮ってるので、そうだと思います。
質問者 : 見てても、つぶやいても、こちらも楽しくなってくるような瞬間を撮っていくと、じっくり物に関わっているとか、友達と言葉でやりとりするところに先生は興味が向かっていったってことですか。
A 保育者 : そうです。もうほんと面白いんです。びっくり^⑤。外で遊んでる時もあって、製作だけじゃなくて、なかなか写真撮れなかったりすると。
質問者 : 面白い場面は保育の中でたくさん見つかるんですね。
A 保育者 : いっぱいあります。

A 保育者の語った内容から、面白いと関心を寄せている場面には下線③のように、製作活動の中で楽しさを味わったり工夫したりする子どもの存在があることが読み取れる。A 保育者はそうした子どもを「製作が得意な子」として捉えているようである。下線④では、その子どもに関してクリスマスツリーを作った場面を思い起こしながら語っている。下線⑤で A 保育者が語った子どもの姿は、保育ドキュメンテーションにも記録されていた。

今日はハロウィンのクッキー作りをしました。「先生！見てみてー！黒くなった！」とAくんがクッキーを見せてくれました。「何が黒くなったのかな？」と問いかけると、「ここにね、赤色塗るでしょ？」とAくんは実演しながら見せてくれました。「赤の上に青塗るとね・・・」「ほら！黒くなった！」と嬉しそうに見せてくれました。前期に絵の具の混色遊びを楽しんだ時もAくんは興味津々に取り組んでいました。今日は油性マジックでも混色すると変化することに気づき、お友達や保育者に実演しながら見せてくれました。混色の楽しさを他の遊びでも活かすAくんに驚きました。子ども達の気づきはとても面白いなと感じました。

A 保育者がインタビューの中で語ったクリスマスツリーを作る場面は、絵の具が混ざり合うことで色が変化するという事に気付いていく子どもの姿に面白さを感じていた。同様に、保育ドキュメンテーションに記録されていたハロウィンの製作活動の場面も、子どもが以前の体験を踏まえて色が混ざり合うことに気付きながら活動を進めているところに面白さを感じていた。また、下線⑤にあるように、「びっくり」という表現で子どもの姿を捉えている。A 保育者にとって面白いと感じる瞬間にはポジティブな驚きが含まれている。これらを読み取ると、A 保育者は自身が設定した環境の中で子どもが新たな気付きを得たり、または保育者の予想を超えたりする姿に関心を寄せている点や、子どもが体験の中で得た気付きを別の活動でも活かす姿に関心を寄せているといえる。このことから、A 保育者の省察の視点には、子どもがある“もの”と関わる体験と、別の“もの”と関わる体験とを結びつけていくといった、子どもの活動における変化や発展などがあると考えられる。

A 保育者との対話の中で、面白いと感じる場面は数多くあることが見えてきた。質問者から A 保育者が面白いと感じる場面は保育ドキュメンテーションとして記録する際にどのようにして選択されているかという点を質問していくと、A 保育者は写真撮影の難しさと共にトイレットペーパーで遊んだ場面を記録した保育ドキュメンテーションに触れながら次のように語った。

質問者 : ひとつその日エピソードにしていこうってすると、どうしても条件が限られてくるってところもあるんですね。

A 保育者 : そうです。お部屋で写真撮れて……。

質問者 : 撮りやすい時とか。

A 保育者 : いつもカメラ外に持ってるわけじゃないので。

質問者 : そうですね。

A 保育者 : こないだカメラ取りに戻ったら、終わってて、遊びが⑥。

質問者 : 過ぎ去ってました？

A 保育者 : 過ぎ去ってて、難しいなと思って。

質問者 : 確かにそれは難しいですね。

A 保育者 : お部屋だとすぐに撮れたりするんだけど。それでも終わってる時あります。

質問者 : そうですね。

A 保育者 : 瞬間、ほんと瞬間で終わってしまう⑦ので。

質問者 : 確かに。そういう面白い瞬間っていうのをいくつも見つけていくんですけど、多分先生がすごく心に残った、楽しそうにお子さんたちが遊んでる様子が写真とエピソードからも出てきて、これ(保育ドキュメンテーションと一緒に見ながら) すごく楽しそうに遊んでる。

A 保育者 : もうすごい盛り上がり。

質問者 : 先生、思い出せますか、その時の場面は。

A 保育者 : これ、ほんとに盛り上がりました。やっぱ普段トイレットペーパーって、これぐらいしか (20 cm程両手で示しながら) 使っては駄目という約束があって、おうちの人にも協力していただいて、みんなにおうちから1個ずつ持ってきてもらったんです。

質問者 : 遊びのために皆さんで手伝ってもらったんですね。

A 保育者 : そう、手伝ってもらって。なので、「もう何してもいいよ」って言ったら、子どもたち、もうすごい巻いたり、ばーってやったり、あとは泳いだりもしました。

質問者 : そういう楽しいところを先生が面白そうだなと思ってエピソードに書いていかれるので、先生の記録の特徴としては、「〇〇遊び」と書いてあるように、具体的な何か使ってる素材、物でたっぷり遊んでるというのが、何度も出てきたんですね。

< 中略 >

質問者：毎回違う遊びの場面を捉えてるんですけど、そのエピソードの中に何度もそこで使った素材、トイレットペーパーで遊んだっていう出来事なら、つぶやきにいっぱいトイレットペーパー、トイレットペーパーとか出てくるので、やっぱりそれだけすごく物とのつながりとか、楽しんでるっていうのを一生懸命伝えようとしてるんだというのが特徴的でした。

あとは「遊び」という表現をした前後に、「ダイナミック」とか「思い切り」といった言葉を使っている文章もあったので、その辺は何か意識してらっしゃるんですか。

A 保育者：伸び伸びと遊ばせたくなって^⑧、やっぱ特に夏はダイナミックに遊ぶっていうのがテーマだった^⑨ので、そういう言葉を多用してました。

質問者：なるほど。じゃあ先生が日頃から意識してらっしゃる保育の方向性みたいなことが文章にも表れてくるっていうことですか。

A 保育者：そうです。伸び伸びといろんな気持ちとか育みたいと思ってる^⑩ので、多分そういう言葉をたくさん使ってると思います。

A 保育者が下線⑥で語ったように、保育中に記録として残したい場面はあるが、保育ドキュメンテーションとして記録できる場面は写真撮影が可能な場面に限られる。A 保育者は、写真を撮影しようとしたが下線⑥や⑦で「終わった」と表現している。ある遊びの場面を撮影することは可能でも、省察の視点で考察したように、子どもの活動における変化や発展などが見られた状況を撮影できないことは、A 保育者にとって「瞬間で終わってしまう」と感じることに繋がっている。保育者が感じる「遊びが終わった」という場面は、子どもも同じように感じているとは限らない。しかし A 保育者が語る遊びの瞬間や終わりという印象は、保育ドキュメンテーションの記録で表現されているような「盛り上がった」という場面の続きの姿や、友達とのやりとりの後の姿などを指していると考えられる。子どもが活動に参加する中で味わう感情の動きや、集団の雰囲気に関心を寄せる A 保育者の保育観が語られているといえる。

下線⑥で語った撮影の難しさのように、保育ドキュメンテーションは、A 保育者が保育する中で出会う様々な面白い場面のごく一部ではあるが、限られた場面からその日記録しておきたい内容が選択されている。質問者との対話の中で、A 保育者は保育ドキュメンテーションを見ながらトイレットペーパーを使った遊びの場面を振り返った。その際、下線⑧、⑨、⑩では、A 保育者が期待する子どもの育ちが語られている。また、下線⑨のように、この時期に経験してほしい内容も語られている。A 保育者は子どもたちに「伸び伸び」と遊んでほしいという願いを持っており、その願いを子どもが実現していく姿は、例えば作って遊ぶ中でもものとの組み合わせるといった工夫する姿や、紙や粘土のような可塑性に富んだ素材を用いて自由な発想で遊ぶ姿ということになる。A 保育者が子どもの活動の変化や発展に面白さを感じている時、背景には A 保育者の子どもの育ちに対する願いが込められている。このことから、A 保育者の省察の視点には、自身の保育のねらいや子どもに対する願いが含まれていると考えられる。加えて、トイレットペーパーを用いた遊びは、家庭にも協力してもらっていることや、子どもたちが楽しそうに遊んだことが写真や記述にも残されていることから、A 保育者にとっても思い入れのある活動だったといえる。保育者にとって、子どもが楽しむ姿を想像しながら十分な環境の準備をした保育実践の中で、子どもが充実感を味わったり、楽しさに支えられながら活動を展開したりしていく姿を見ることは大きな喜びや達成感を味わう機会となる。保育者自身がある種の手応えを感じる場面は、自身の保育で大切にしたい価値を再確認するという省察につながる。

V. 総合考察

本研究では、写真とエピソード記録で構成される保育ドキュメンテーションは、保育者の実践と振り返りにおいてどのような意義があり、保育の質の向上に寄与するかを検討するために、保育ドキュメンテーションを作成している保育者がどのような関心にもとづいて記録を作成しており、記録にはどのような省察の視点が見られるかを明らかにしてきた。

保育ドキュメンテーションのテキストを分析した結果、A 保育者は保育ドキュメンテーションを作成する際、自身が面白いと感じた場面を意識していた。この保育場面は「びっくり」と表現したように、ポジティブな驚きにつながる子どもの姿があった。Schön (1983) は、プロフェッショナルといわれる実践家達を省察的実践家と呼び、彼らの経験から学ぶ過程を省察的実践と呼んだ。省察的実践は、プロフェッショナルが持つノウハウに関して、時として驚きをもたらすような場面に遭遇すると、驚きに対してそれを省察することによって応答しようとする行為である⁹⁾。この驚きは、問題状況に直面するということであるが、保育実践の中で言い換えるならば、実践の様々

な「問い」に出会うということである。A 保育者が保育の中で出会った「びっくり」という瞬間には、A 保育者の省察につながる視点が含まれているといえる。その視点とは、子どもはなぜそのような行為をしたかという問いによって生まれる子どもを理解しようとする視点や、自身の驚きの意味を改めて問うという自己と向き合う視点である。また、A 保育者が子どもの活動の変化や発展に面白さを感じている時、背景には A 保育者の子どもの育ちに対する願いが込められていた。A 保育者の省察の視点には、自身の保育のねらいや子どもに対する願いが含まれているという点も明らかになった。保育ドキュメンテーションを作成する過程で改めて保育のねらいを言語化していくことは、子どもの育ちや自身の関わりを見つめ直すという省察を促すことにつながる。

以上から、保育ドキュメンテーションを作成し、記録をもとに振り返ることは保育者の省察を促し、保育の質の向上に寄与する可能性があるという点が考察できた。

今後の発展的な課題は2つある。ひとつは、研究対象者の人数である。本研究では1名の保育者を対象に分析を行ってきたが、今後は複数の対象者に同様の研究を行い、蓄積されたデータをもとに記録による保育者の実践と振り返りの意義を明らかにしたい。もうひとつは、保育者の省察を促すための、記録をもとに保育者間や研究者など多様な視点で語り合う方法の検討である。本研究では、保育ドキュメンテーションの分析結果を踏まえたインタビューを実施したことにより、質問者との対話そのものも保育者の省察を促していた。A 保育者はインタビューの中で、「他者からドキュメンテーションの詳しい内容を話されたことは初めてだったので。どうやって書いていいか、最初全然分からなくて。手探りで始めて。そこにいろんな先生の掲示もしてあるのでちょっと見て、こういうふうに読み取るんだって参考にしながら。なので、ほんとに手探りでやっています。なので、今いろいろとお話しいただいて、『あ、なるほど』って思ったので。」と語っていた。A 保育者が記録方法や省察の視点など試行錯誤してきた中で実施したインタビューは、A 保育者の保育に対する考えを整理することにもつながっていた。質問者から「このインタビューで自分の良さみたいなのところに気付くことはできたでしょうか。先生がこんなところを楽しんでいると思って保育してらっしゃるってことが伝わったらいいなと思いますけど。」と伝えると、A 保育者は「良かったです。ほんとに子どもたちが何か盛り上がることとかも一緒に楽しみながら、それをエピソードにいつも載せよう、載せようと思ってやっているので。そうやって第三者に見ていただいて、何かうれしいです。伝わってうれしいなって思います。」と語った。こうした対話からも読み取れるように、保育者が日頃大切にしている考えが他者に理解されたと実感することは、改めて自己の保育観や信念を見つめ直すという省察を促すといえる。記録をもとにした保育者間の学び合いに関しては多様な方法が実践的に検討されているが、本研究は実践者と研究者それぞれの立場を活かした実践として保育者の学びに寄与する可能性を秘めている。本研究で得た知見を踏まえて、保育者の学びを支援する方法を検討していきたい。

謝辞

本研究を快く引き受けてくださり、研究に関するご理解、ご協力を賜りましたU園の園長先生、職員の皆様に心より感謝申し上げます。A 先生には、保育業務でご多忙にも関わらずインタビューの場を設けていただきました。また、園長先生をはじめ職員の皆様にいつも温かく受け入れていただいたおかげで研究を進めることができました。改めて感謝いたします。

引用・参考文献

- (1) 秋田喜代美, 箕輪潤子, 高櫻綾子. 保育の質研究の展望と課題. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, pp. 289-305, 2008.
- (2) 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会 議論のとりまとめ: 「中間的な論点の整理」における総論的事項に関する考察を中心に, 2020.
- (3) 厚生労働省. 保育所保育指針解説, 2018.
- (4) 厚生労働省. 保育所保育指針, 2017.
- (5) 請川滋大, 高橋健介, 相場靖明. 保育におけるドキュメンテーションの活用. ななみ書房, 2016.
- (6) 秋田喜代美, 松本理寿輝. 保育の質を高めるドキュメンテーション: 園の物語の探究. 中央法規出版, 2021.
- (7) 大豆生田啓友, おおえだけいこ. 日本版保育ドキュメンテーションのすすめ. 小学館, 2020.
- (8) 森眞理. 子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門. 小学館, 2016.
- (9) Donald A. Schön. *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, 1983. (ドナルド A ショーン 柳沢昌一・三輪健二 (監訳) . 省察的实践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考. 鳳書房, 2007.)